資料

山川海の流域連携について

趣　旨

- 平成 26 年 5 月 14 日に開催された第 12 回市民企画会議においてごみ・流木、土砂、木づかいについては、流域連携のテーマとし、具体的に検討方針、主務担当者やアウトプットを考えていくことで了承された。
- その後、山・川・海の地域部会 WG において、各担当者の選出を行った。

１．ごみ・流木

【山部会】豊田市矢作川研究所　洲崎主任研究員、奥矢作森林塾　大島理事長

【川部会】愛知工業大学工学部都市環境学科　内田教授

【海部会】伊勢・三河湾流域ネットワーク　井上共同代表世話人

２．土砂

【山部会】東京大学　大学院農学生命科学研究科　附属演習林　生態水文学研究所　蔵治所長

【川部会】未定

【海部会】大阪大学大学院工学研究科　青木教授

（名城大学大学院総合学術研究科　鈴木特任教授）

３．木づかい

【山部会】根羽村森林組合　今村参事

【川部会】豊田市自然愛護協会　光岡会長

【海部会】東幡豆漁業協同組合　石川組合長

４．その他、流域連携へのご意見

【山部会】

・山村再生担い手事例集の作成について、川・海部会のメンバーと連携したい。

【川部会】

・流域を流れていくものとして、水と物質と土砂と人の意識が考えられる。水量、水質の問題はあるが、切実な問題として挙がっていないのであれば、その３つのテーマでよい。

・矢作川は水量が少ないことで有名で、それによる弊害は多いと思う。山の植生がどうなると涵養量が多くなるか。また、海側へは、干潟環境、ヨシ原環境について、海と連携して考えていく必要がある。

【海部会】

・漁業者との交流については、海部会単独で行うのではなく、懇談会全体で広く位置づけたい。

・連携についての会議は、改めて設けるのではなく、全体で集まるときに時間を設けて実施してほしい。

以上

山川海の流域連携テーマ「ごみ・流木」について

	Ⅰ．検討方針	原案（井上座長）	10 月 23 日市民企画会議　主な意見	1 月 29 日市民会議　主な意見
ごみ・流木	①流域連携で議論したい問題・課題	・ごみの種類と発生場所についての調査結果と実情との比較 ・海から見て自然ごみを「流木」、その他のごみを「生活ごみ」と考えて良いか ・「生活ごみ」の中に水産業が発生源のものもある。この課題の扱いは？ ・水産物と混獲されるごみの実態を知った上で、この取り扱いの検討 ・流木の影響について「山」「川」「海」の共通認識の持ち方（桃取資料） ・ごみには数えられていないが、水田の代掻き時濁水も生活ごみの一種？ 理詰めの濁水対策（例えば不耕起稲作栽培法と慣行栽培の炭酸ガス発生量比較） ・その他	・近年は漁港の流木被害が多い。桃取漁港は流木で埋まりダムのようになった。愛知県の切り捨て間伐の基準で、60cm にカットした流木が集まっていたのが印象的であった。（井上） →普通は労力がかかるので短く切らない（山本薫） ・ごみがどこから出てくるのかの一般論と、漁港の流木被害対策をどうしていくのかを考えたい。（井上） ・しらす漁船で網を引くと流木に引っかかる。漁業者が流木などを片付ける費用が問題（青木）	・生活ゴミをどうにかして減らせないか。（井上） ・木づかいがうまくいけば流木問題の解決につながるかどうかを考えたい。（光岡） ・奈佐の浜では大半が生活ゴミで小径木の広葉樹も多かった。流木は漁業被害を生むが自然現象の面もある。（洲崎） ・矢作ダムがなかったら流木被害はもっと大きくなるかもしれない。（光岡）
	②問題解決に向けて他部会に求めるもの、具体的に検討したいこと	・流木を含むごみが生業である水産への影響問題の共有 ・水産関係者以外の市民生活への上記影響についての議論 ・法律（デポジット制の施行等）による削減 ・沿岸市民による国産材の積極的な利用支援 ・「カーボン・オフセット」の方法論で企業の参画を得た流域活動（森・里） ・「滋賀県湖東地域材循環システム協議会」活動の勉強会 ・その他	・ごみ、流木の戸籍や発生源を調べることはかかせない。（黒田）	・流木が増えているのか減っているのか、実態を把握するための聞き取り調査をしてみてはどうか。（洲崎） ・生活ゴミの削減は、市民の善意だけでは限界がある。デポジット制度等の導入を検討していく必要がある。（井上） ・スポンサー等をつけるなどして流木アートをうまく活用できないか。（菅原）
	③到達目標（今後２ヶ年間）	・デポジット制度採用の働きかけ ・「カーボン・オフセット」の実践検討 森の健康診断活動が次に目指していることではないか？ ・その他		
	Ⅱ．検討の進め方について			
	①代表者会議の進め方	・位置付けの再確認 ・会議前にメモ作成して頂いて事前勉強（時間切れの回避） ・その他	・会議前に各自メモを作成して持ち寄る。（井上） ・会議やテーマを集まりやすい名称にして、自然に集まって貰える様にしたい。（高橋）	
	②代表者会議と市民企画会議との連携	・相互の情報提供（課題の共有と実践活動との結びつき） 水環境学会 10 月号は「特集　海洋のケイ酸－意外なる可能性・複雑性－」 ケイ酸は森林土壌が創る・健全なイネ稲作に必要なケイ酸・海の牧草と呼ばれるケイ藻⇒流域を繋ぐ具体的な「キーワード」　以上	・市民会議は 18 時開始がよい。各代表が考えを持ち寄って話し合う方が早い。市民が参加して共感、納得できるようにしたい。（今村） ・部会とのパイプ役になるべきだが、仮に 3 人でも始めるべき。そこから徐々に参加者が増えていくイメージを持つ。（光岡）	・食物連鎖が正常になるには山の土壌がよくならないといけない。特にケイ酸に着目したい。（井上）

山川海の流域連携のテーマの「土砂」について

	Ⅰ．検討方針	原案（青木座長）	10 月 23 日市民企画会議　主な意見	1 月 29 日市民会議　主な意見
土砂	①流域連携で議論したい問題・課題	・最終的な目標は、流域圏全体の土砂の管理を総合的に行うにはどうすべきかについて提言することかと思います。ただし、その提言は単に行政に対する注文で終わるのではなく、これまでの行政の方向性を大きく変えさせるような、市民レベルの結束が必要と思います。そのために以下の様なプロセスで議論してはどうでしょうか？ ・流域圏全体で土砂管理（土砂の配分）を最適化しようとする場合、何が障害となるのか、何が必要なのかを議論する。 ・そのために、管理主体は何をすべきなのかを明らかにする。 ・市民あるいは市民団体として何ができるかを議論する。	・海の堤防で干潟が出来ない。砂がたまらない。被災地で防潮堤が壊れた場所で干潟ができた。海岸管理の問題も関係がある。（黒田） ・三河湾の問題は干拓。埋めるのが問題（高橋） ・一番まとまらないのが川。生物にとっては土砂が流れて攪乱されることはよい。一方で粒径と流すタイミングなどの相反する問題や、技術的に出来ることとできないことも出てくる。（内田） ・我々は土砂を運べないので、国に示していくことが大事。（光岡） ・小さな実験でも土砂問題の活路を見いだして行きたい。（黒田）	・土砂災害の問題は山の管理と関係している。（黒田） ・林業は水源涵養等を通じて土砂災害の問題にも責任を負っている。（今村） ・ダムは流木をとめる役割もあるので、あたまごなしに否定するのではなく、実態を知った上で土砂問題を考えていく必要がある。（光岡） ・上流から土砂が流れてこなくなり、干潟や生き物が減った。（高橋）
	②問題解決に向けて他部会に求めるもの、具体的に検討したいこと	・山川海のそれぞれにおいて、土砂に関してどのような問題があるのかを明らかにし、それぞれの守備範囲でどのような状態が望ましい状態なのかを整理する。 ・山川海のそれぞれにおける土砂の管理主体とその管理方針について整理する。	・土砂問題に対し市民レベルで何ができるか。市民会議が行政の動きを後押しするようにできないか。（青木） ・山は、災害を起こすので土砂を出したくない。海は土砂をほしい。川は流し方を工夫してもらわないと困る。望ましい土砂の状態を出し合いスタートラインとし、土砂管理の妥協点を見いだしたい。（青木） ・海部会では、ダムの砂で干潟をつくろうと模索している。生物がどのようにつくのか。山川の人達にも参加して貰い、このような場で集まり発表し合いながら、方向性を見いだしていきたい。（青木） ・山川海にとって土砂がどういう存在なのか。泥はいるが砂はいらないなどの相反する問題を付き合わせる作業が必要（黒田）	・森林組合のダンプを使って矢作ダムの砂を運ぶ等の海との連携も考えられる。（今村）
	③到達目標（今後２ヶ年間）			
	Ⅱ．検討の進め方について			
	①代表者会議の進め方	・代表者会議は、共通のテーマについて、山川海の立場で整理したことを持ち寄って発表するような形式は如何でしょうか？	・会議前に各自メモを作成して持ち寄る。（井上） ・会議やテーマを集まりやすい名称にして、自然に集まって貰える様にしたい。（高橋）	
	②代表者会議と市民企画会議との連携	・それを市民企画会議の席上で行う事でもいいように思います。	・市民会議は 18 時開始がよい。各代表が考えを持ち寄って話し合う方が早い。市民が参加して共感、納得できるようにしたい。（今村） ・部会とのパイプ役になるべきだが、仮に 3 人でも始めるべき。そこから徐々に参加者が増えていくイメージを持つ。（光岡）	

山川海の流域連携テーマ「木づかい」について

	Ⅰ．検討方針	原案（今村参事）	10 月 23 日市民企画会議　主な意見	1 月 29 日市民会議　主な意見
木づかい	①流域連携で議論したい問題・課題	ア　流量・土砂問題の共通認識 イ　ゴミ問題解決のための方針 ウ　木づかい推進のための方針	・普段の市民生活の中で木がどのように捉えられているのかは根本的な問題。（青木）	・上流域の木を下流域の人たちに使ってもらいたい。（今村） ・人生のサイクルの中で地元の木を使ってもらうようにできるとよい。（今村） ・空き家が発生する一方で、新築は毎年行われている。ハウスメーカー等は合成材を使っており、木が使われていないわけではないが、木づかいは単純に量の問題だけではない。（小澤）
	②問題解決に向けて他部会に求めるもの、具体的に検討したいこと	ア　川・海部会で考えられる木づかいとはどんなものがあるか イ　川・海を親しみ、その理想的な川・海の在り方のために、「木づかい」によってどんなことができるのか ウ　川・海部会から山部会に求めるものとは何か エ　山部会員は恐らく余り、川・海部会に参加していないと考えられるので、そのような人が始めて、川・海に問題意識を持つのに適した現地見学に相応しい場所はどこか知りたい	・何故木を使うのか。市民の理解を得るには必要性の共通認識を持つところから始める必要がある。（黒田） ・下流の人に山が健康であることの大切さを分かって欲しい。山村の消滅を防ぐには、下流の人達に木を使って貰う必要がある。（今村）	・川や海での活動拠点に小屋を提供する等による木づかいを通じた流域連携も考えていきたい。（今村） ・構造材としての木材活用やスギダラケのような市民運動と連携していくことも検討したい。（今村） ・間伐材して運び出す山と、間伐して切り捨てる山を選別することを検討する必要がある。（小澤） ・生産林だけでなく環境林としての森林の機能をもっと周知する必要がある。（本守） ・住宅のスクラップアンドビルド等の生活の質の問題も木づかいと一緒に考えていきたい。（黒田） ・沖縄のような台風常襲地帯や沿岸部の住宅は、木造から鉄筋コンクリート造に変ってきた。災害対策と家づくりを本気で考えないといけない。（小澤）
	③到達目標（今後２ヶ年間）	ア　「木づかいガイドライン」の完成（継続的であるが） イ　それに伴う可能な限りの「木づかい」の実現 ウ　木づかい推進のシステム化（各市町村等による木づかいガイドライン事業の予算化等） エ　川・海部会から山部会に求められる課題の解決	・川や海でも木づかいをしてほしい。流木は燃やさなければＣＯ^{2}のクレジットになる。露天風呂や流木アート、蒸気産業など、どんな木づかいができるか。到達目標はガイドライン作りと木づかいの実現、市町村での事業化など。（今村）	
	Ⅱ．検討の進め方について			
	①代表者会議の進め方	（会議は豊田、時間は 18:00～ 、日程は事務局決定） ア　事前にテーマを決めて、あらかじめ各代表が考え方を事前に整理した上で会議を行う イ　決めるべきことを明確にしておく ウ　決めるべきことの期限を明確にしておく	・会議前に各自メモを作成して持ち寄る。（井上） ・会議やテーマを集まりやすい名称にして、自然に集まって貰える様にしたい。（高橋	
	②代表者会議と市民企画会議との連携	原則的に代表者会議での検討経過、検討結果を市民企画会議に提示し、これを市民企画会議で検討する際 ア　常に市民目線で市民が会議に参加できるように努めること イ　一市民が納得できるような共通認識の提示に努めること	・市民会議は 18 時開始がよい。各代表が考えを持ち寄って話し合う方が早い。市民が参加して共感、納得できるようにしたい。（今村） ・部会とのパイプ役になるべきだが、仮に 3 人でも始めるべき。そこから徐々に参加者が増えていくイメージを持つ。（光岡）	